

平成 23 年 6 月 17 日

平成 23 年度入学式式辞(抜粋)

学 長 木元 幸一

本日は、ご家族保護者の皆様ようこそいらっしゃいました。この大震災に際し、皆様ご心配のことも多いかと思ひまして、簡素化を心がけながら、皆様にはあえて、実際に来て本学を見て、歩いて、安心してくださいますとの気持ちでご列席頂きました。大学の日程も、日常できるところから粛々と始め、通常の生活を回復していくことが大切と考えます。本学は、休みません。学生を受け入れ、お互いに声を掛け合い、状況を確認し、相談事があれば相談する相手がいるし、相談する場所があります。先生方は授業の準備を行い、学生は勉強を始め本学通常の生活を維持することを、教育機関として優先しようということになりました。

東日本大震災では、今も懸命の救出・復興援助と被害の拡散を防ぐ活動が行なわれています。犠牲者の方々に対し心より哀悼の意を表したいと思ひます。自然現象の地震に始まり、津波が発生し、津波が火事を起こし、原子力発電所を損傷し、その被害が未だに続いています。災害の連鎖です。しかし、一つの自然現象が起こす災害の連鎖が略奪・暴動という人災にまでつながる国もあります。日本人は、誇りある心まで壊されることなく、この戦後最大のピンチに勇敢に立ち向かおうとしています。また、多くの方々が、それぞれのやり方でそれを支えようとしています。日本だけでなく世界中の人々が、そういう日本人に共感を持って励まし、助けようと行動してくれています。当事者の日本人としては、被災した方も、被災から免れた人もお互いに力を合わせてこの困難に立ち向かい、世界中の応援に応えなくてはなりません。夏目漱石の「吾輩は猫である」という小説に出てくる物理学者のモデルとして知られる寺田寅彦が日本人の自然観について、語っています。言い方はちょっと古めかしいのですが、日本人にとっての自然は、「慈母の自然」と「厳父の自然」と言っていて

います。日本ほど自然の恵みにあふれている国はありません。それが「慈母の自然」です。一方で、台風や地震等日本ほど自然災害の多いところはありません。それが「厳父の自然」です。昔から日本は自然災害に見舞われながらも、自然の恵みを大切にし、自然と敵対せずに常に修復し復興してきたのです。今回も、必ずや日本は復興するに違いありません。資源不足の経済状況まで考えると、それは被災地域、被災者の方々だけで留まることなく日本の国全体に影響するでしょう。皆さんは、今大学で学べる環境にあることが恵まれているという自覚を持って日々を過ごしてください。被災に会いながらも懸命に生きている方々がいて、放射能被害の拡散を最前線で命を懸けて防いでいる人達がいることを忘れずにしっかり記憶してください。皆さんが、世の中に役に立つ時が来て、何れは皆さんが日本の社会を支える立場となるのです。次の時代の日本を築くために担うべき逞しい力をつけて頂きたいと思います。

本日は、本学が今年創立百三十周年を迎えるという記念すべき入学式であります。去る三月の学位授与式において本学卒業生が十万人を突破しました。

では、今から百三十年前、明治十四年で明治維新後、新しい時代の黎明期に、校祖渡邊辰五郎が和洋裁縫伝習所を創設しました。今我が国の平均寿命は世界一ですが、その頃平均寿命（明治十三年の平均寿命）は約三十歳とされています。人口も今の三分の一の約四千万人です。渡邊辰五郎は、単に裁縫の出来る人を育てたのではなく、折しも明治維新後の日本の教育制度の黎明期、裁縫を教えることが出来る人を育てたのです。その教え子が作った学校法人が今では全国に三十もあり、経営する学校は幼稚園も含めると百以上にもなります。そのことによって渡邊辰五郎は、近代日本の教育家としての日本人十三人の中に、福沢諭吉、新島襄、津田梅子、吉田松陰と並び称されています。渡邊辰五郎の尊い教えは、「自主自律」となって裁縫を教えることによって身を立てる女性を育てました。

第二次大戦後大学になって初期の学長青木誠四郎は、第二次大戦前の日本人

の貧しさは生活技術の貧しさからくるのであるから、豊かな生活技術を身につけるようになければならない。その生活技術を研究し探求する大学を作ろうと考え、そこで養成された人材は、社会を豊かにするばかりで無く、自分自身の人生も幸福にするという確信をもっておられました。この考えが、今の東京家政大学の基礎を築いたといえます。そして本学は、戦後の国民の生活技術を豊かにすることに貢献し、家庭科教員を始め多くの人材を全国各地に輩出してきました。それを支えたのが、青木誠四郎の「愛情・勤勉・聡明」という生活信条で、今日の人文学部や大学院まで広がった本学の校風となっております。いま日本の生活技術・生活意識・文化の高さはアジアの憧れであり、欧米では既によく知られていることです。そして平均寿命は世界一です。それは第二次世界大戦後からの話で、昭和の初めにはまだ平均寿命は四十歳程度です。第二次大戦では男子の平均寿命は三十歳近くまで下がり、死んだ若者は二百万人以上です。戦争での若者の死は自然の災害と比較にならないほど大きなものであることも知っておいてください。戦争後の復興を考えると今度の災害からも日本は必ず立ち直ります。その担い手は間違いなく、皆さん若い世代です。